

事業完了報告書（東大阪市）

調査研究期間等

調査研究期間	委託を受けた日 ～ 令和7年3月15日
調査研究事項	以下のⅠ～Ⅴのいずれであるかを記載した上で、研究テーマを明記する。 Ⅰ．教育課程、教育環境整備に関すること
調査研究のねらい	Ⅰ．教育課程、教育環境整備に関すること 【東大阪市立意岐部中学校】 研究テーマ ③中学校教育を実施するに必要な、日本語を母語としない方向けの日本語指導の在り方（環境整備含む） 「仲間とともに学びを綴り生活を綴るおとなの中学生」 夜間学級生は、一人ひとりの学習経験が多岐にわたるため、日本語の習熟度だけでなく日本の義務教育における学習の進度が全く同じという生徒は存在しない。そのため、二者懇談などを利用してそれぞれの状況や想いを丁寧に聞き取っている。また、日本での生活者として必要な日本語と、中学校教育に必要な日本語の両方の習得をめざしているところである。さらに、本校では2019年度から毎年「日本語指導が必要な帰国生徒・外国人生徒入学者選抜」を受験し隣接する大阪府立布施北高等学校に進学していることから、10代の外国人生徒の進学保障、追指導についても研究をすすめている。 2023年度は、日本語指導支援員が中心となり、教科等の学びと日本での生活に必要な日本語をより効果的に関連付ける教材研究に教職員全員で取り組んだ。「相手の言葉を聞き取り、自分のことを話して伝える力」「自分のことを文章で表現する力」「日本語を自分の生活に活かす力」等、生徒につけたい力を設定し、言語活動を効果的に行うための授業プリント、ICT機器の活用等を研究しながら、つけたい力への効果的なアプローチをすすめてきた。 授業は書くこと、話すことを中心に行いながら、母語で安心して話ができる環境も確保すること、生徒の母語対応の充実を図ること、また自己の人生経験と照応しながら、文集「おとなの中学生」を表現豊かに綴ることができるようになるため、教科横断を意識しながら日本語指導に取り組んだ。東大阪市事業における公開授業研修を「日本語指導の在り方について」をテーマとし、研究の検証を行った。 このように日本語を母語としない方向けの日本語指導の在り方について、具体的に研究を進めはじめているなか、さらなる進化発展が求められる。実際に授業を受けている生徒たちの授業に対する想いはさまざまであると考えられるため、2024度は生徒への授業アンケートの作成、活用、分析、考察など、より日本語指導の在り方について研究を進める。 さらに、タブレット端末を積極的に活用する授業を展開し、かねてから夜間中学の課題である欠席者への対応や、反復練習や繰り返し学習に関しては、引き続きAIドリルや家庭学習にもタブレットを活用する。タブレットを身近な学習ツールとして使用するなかで、生徒の学びを保障し、学びを通して得られた経験をもとに、文集「おとなの中学生」を綴ることにつなげる。 加えて、2024年度より意岐部中学校区全体の合同研修に夜間学級教職員が参加し、個別人権課題や進路保障などの教育活動を日本語指導という観点を軸に、小学校・昼間部の中学校と連携して行う。 全体を通して、中学校区全体で夜間中学の存在を校区の特色に組み込み、意岐部中

学校区ブロックにおいて、小中学校の児童生徒との交流や意岐部フィエスタでの発表を行い、夜間中学の豊かな学びを追及する。また、社会福祉協議会や国際識字年推進東大阪連絡会などの関係機関とも連携を深め、夜間中学の存在が必要な人に届くように、相談体制の強化を図る。

以上の研究を進めるうえでは、教材に視覚的や感覚的な工夫が必要であり、本校独自の教材の作成・配付・活用するために今回の事業での消耗品を活用する。また、それらの教材を東大阪市夜間中学として共有しながら進めていく。

【東大阪市立布施中学校】

I. 教育課程、教育環境整備に関すること

①中学校教育を実施するに必要な、高齢者向けの教育課程の在り方

本校では生徒73人のうち、60代以上の生徒が19人在籍している。様々な理由で義務教育を受けることができなかった生徒たちで、ほとんど欠席することなく毎日登校する生徒の多くは、高齢層の生徒たちである。「学ぶことは生きること」「夜間中学は今日を生き、明日を生きるための学び舎」という生徒の思いから、調査研究のねらいを定めたい。

高齢の生徒の中には長年日本で生活しているが、文字の読み書きが十分ではない生徒が少なくない。文字の習得に注力しつつ、一人ひとりが自らの生き方を主体的に決めていく力をつけるという教育目標を達成するべく、生徒の実態に寄り添った教科横断的な学習活動を実施してきた。学習形態も令和5年度から、従来のタブレットを使った学習に加え、AIドリルでの学習も取り入れ、個別最適な学びに取り組んでいる。また、学んだ文字で自らの生い立ちや想いを綴り、その想いを聴き合うことで自己を見つめ高め合う対話的な学びの場、社会の中でより豊かに生きるための学びの場をつくりたい。

【個別最適な学びと協働的な学びの推進】

令和5年度3月に校内で実施した一年間を振り返るアンケートで、「授業でタブレットを使うと学びやすいと思いますか」という質問に対し、高齢層の生徒の90.9%が肯定的（うち強肯定27.3%）な回答であった。これを受けて、よりタブレットでのAIドリルや漢字や計算等の各種アプリを活用した、個別最適な学びを進めたい。併せて、タブレットでの学びが孤立した学びに陥らないよう、グループワークを取り入れた協働的な学びのスタイルを推進したい。身近な仲間と共感的に聴き合う活動を繰り返すことで自尊感情を高め、自信をもって他者に想いを伝える力をつけたい。

また、同じくアンケート結果から、「日本での生活で不安や困っていることは減りましたか」の質問に高齢層の生徒の62.5%が否定的（うち強否定12.5%）な回答であった。病院や役所での手続き、地域の人とのコミュニケーション等での不安感が強く残っていることがわかった。このことから実生活に即した、グループでの対話的な学びを継続していく。また、養護教諭とも連携した保健分野の学習の中で、健康に関する学びや情報の受け取り方等の学びにもつなげる。

【文集「おとなの中学生」作成に向けて】

一年間の学びのまとめとして、自らの人生経験の中での想いや自分にとって夜間中学で学ぶ意義などを「おとなの中学生」に綴る。昼間部や学校区の小学校などの学齢の児童生徒との交流や、その他外部団体との交流等も含めた出会い、また芸術鑑賞で豊かな表現と出会う機会を作る。そこから学んだ文字や表現で自らの生い立ちや想いを綴り、その想いを聴き合い、自己を見つめ高め合う対話的な学びの中で、自信をもって自分の想いを綴ることができる態度を育む。

	以上の研究を進めるうえで、タブレットの活用だけでは十分ではなく、紙媒体での教材の大きさや視覚的・感覚的な工夫が必要である。本校独自の教材の作成・配付・活用するために今回の事業での消耗品を活用する。また、それらの教材を意岐部夜間中学とも共有しながら、継続して進めていく。 ※文集「おとなの中学生」…東大阪市の夜間中学校で作られている作文集である。作文には生徒自身の故郷への思いや、日本に来てからのこと、今までの生い立ちなどが書かれており、作文の作成過程において、生徒自身が今までの生き方を見つめることになる。夜間中学にたどりついた道筋や、生い立ちの背景などがさまざまである夜間中学生にとって、自分の生活と向き合い、仲間の生き方を知ることは、これからの生き方につながっていくものである。毎年3月には「おとなの中学生」作文発表会を行っている。
調査研究の成果	【意岐部中学校】 I. 教育課程、教育環境整備に関すること ③中学校教育を実施するに必要な、日本語を母語としない方向けの日本語指導の在り方 2024年度はこれまで以上に外国籍の生徒が増加し、日本語を母語としない生徒向けの日本語指導の在り方についてさらに研究を進める1年となった。 毎月定例の校内研修を計画し、計画的に実施することができた。日本語指導を含む教科の内容に関すること、またそれぞれの授業における生徒の具体的な様子の共有という2方向からの研修を開催した。日本語指導については日本語支援員を講師として、初期日本語指導の効果的な方法について、「書く」「聞く」「読む」「話す」の4技能を同時に学ぶことができるようにするためにどのように授業を構成していくかについて研究を進めた。また各授業の生徒の様子との交流では、母語が異なる生徒たちが安心して自分の意見や考えを仲間に伝えることができ、また仲間の思いを大切に受け取ることができるような授業づくりについて交流した。 文集「おとなの中学生」作成に向けて、日ごろから二者懇談やアンケートを行い、できる限り生徒の思いに寄り添うようにしてきた。その結果、これまでの生活の中で感じていた辛さや、日本語を理解することで感じることもできた喜びなどを作文を通して綴ることができた。 市内の中学生が参加する市の行事、生活体験意見発表会や国際交流フェスティバル、中学校区で開催する意岐部フィエスタなどにもできる限り参加し、自分の作文を自信をもって発表することができた。これらの行事を通して、さらに自分自身の生き方に自信を持つことができるようになった生徒もたくさんいた。 日本での生活者として将来を考えている10代の生徒の多くは、隣接する大阪府立布施北高校への進学を希望しており、長期休暇中や毎日の始業前の補習授業も計画的に行ってきた。ICT機器を利用した学習は家庭学習のツールとして有効であった。10代の生徒はこれからも増加することが予想され、今後も進学保障について研究を進める必要がある。 さらに今年度からは意岐部中学校区の全教職員が集い、個別人権課題や進路保障などについて研修を行う場に本学級の教職員も参加し、中学校区として大切にして

いきたいことを教職員と交流した。この研修に参加することや、本学級の公開授業に参加してもらうことで、夜間中学生の存在をより深く中学校区の教職員に伝えることができた。

布施中学校夜間学級との合同研修では、地域の福祉関係者や府立高校定時制の先生に来ていただき、研修を開催した。また福祉とのつながりが必要な生徒も多いことから、社会福祉協議会主催の会議に参加し、多くの情報を得ることができた。

【布施中学校】

I. 教育課程、教育環境整備に関すること

①中学校教育を実施するに必要な、高齢者向けの教育課程の在り方について

今年度、60代以上の高齢の生徒は15名在籍している。そのうち13名はほぼ休むことなく毎日登校している。文字の読み書きが十分に定着していない生徒も少なくない。一人ひとりが自らの生き方を主体的に決めていく力をつけるという教育目標を達成するため、「個別最適な学びと協働的な学びの推進」を軸に教育活動を推進してきた。昨年度実施した一年間の振り返りアンケート結果の中で、「授業でタブレットを使うと学びやすいと思いますか」の質問について、60代以上の生徒の90.9%が肯定的な回答をした。これを受け、タブレットでの視聴覚教材やAIドリル、漢字や計算等のアプリを利用した個別最適な学びを進めてきた。

しかし、頻繁にタブレットでの学習を続けると、目の疲労を訴える生徒が多く、生徒によっては倦怠感や体の不調につながることもあった。また、画面の小さな部分にタッチすることが苦手で、タブレットでの学びに拒否反応を見せる生徒もいたが、粘り強くドリルに取り組む姿も見られた。このような生徒の実態もあり、教員自作の紙媒体での教材を使った学びを軸にしつつ、効果的にタブレットを使う学習を展開してきた。今年度の同アンケートでは、同じ質問について肯定的な回答は63.7%と低下したが、反復して取り組むことで基礎的な学びを習得する効果は大きかった。一方で、仲間と共感的に聴き合うことを中心とした協働的な学びを推進してきた。これまでも継続的に取り組んでいる成果でもあり、高齢の生徒間の人間関係は概ね温かく良好な関係であることから、さらに安心して自分の生き立ちや境遇についてや、想い、考えを積極的に伝え合い、聴き合うことができた。また、市内の小中学生が参加する「朝鮮文化に親しむ東大阪子どもの集い」の参加に向けては、自分たちの想いを子どもたちにどう伝えるかを考え、発表につなげることができた。

一年間の学習のまとめとして、文集「おとなの中学生」の作成に取り組んだ。自分の生き立ちから、夜間学級で学ぶに至る気持ちや、学校での授業や行事、地域の小中学生との交流等から得た学びなどを綴ることができた。